

席田遺跡群調査概報Ⅱ

第2次発掘調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第46集

1978

福岡市教育委員会

正誤表

頁	行	誤	正
3.	F9又	席田遺跡群第1.2次發掘 調查遺跡とその周辺	席田遺跡群第1.2次發掘 調査遺跡と周辺の遺跡
4.	PL7	貝花尾2号墳出土工具 3. 磨(須恵器)	貝花尾2号墳石室出土工具 3. 磨高坏(須恵器)
		4. 直高坏(須恵器)	4. 磨(須恵器)
	PL17	(2)久保園遺跡遺景	(2)久保園遺跡全景
	表1	大谷遺跡遺構表	大谷遺跡遺構二重表
5.	下1		15. 上月隈古墳群
7	上5	清水義圭	清水義圭
	下7	沢尾 達	沢尾 達
9.	上10	田	田
10	上12	相当丁大谷地区	相当す大谷地区
14	下11	長軸2.3?	長軸2.3m?
21	上2	住居址序号	遺構名
		計測(m)現存値	計測(m)現存値
PL7		貝花尾2号墳石室出土工具	貝花尾2号墳石室出土工具
416	(3)	6.7号住居址遺物出土状況	6.7号住居址内遺物出土状況

席田遺跡群調査概報Ⅱ

福岡市博多区席田総合運動公園建設に伴う発掘調査

昭和53年3月

福岡市教育委員会

序 文

この報告書は、東平尾総合運動公園建設に伴う調査報告で、『席田遺跡』第一次発掘調査概報に続くものであります。

調査は、昭和49年度に建設予定地全域にわたって分布調査を実施し、公園建設計画に合わせて昭和50年度から継続して発掘調査を実施しております。

発掘調査の成果につきましては、報告書に見られるように弥生時代の住居群を中心に、多くの成果をあげることができました。これも偏に調査に対して、ご理解とご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助とご配慮によるものであり、心から感謝申し上げます。

昭和58年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 戸 田 成 一

例　　言

1. 本概報は、福岡市博多区大字東平尾所在、席田総合運動公園建設設計圖に於ける、サイクリングロード、遊歩道建設予定地内の工事に伴い、昭和51年度に実施した第2次席田遺跡群発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は、福岡市教育委員会 社会教育部 文化課埋蔵文化財係が担当した。試掘地点及び、遊歩道（貝花尾地区）を飛高が、遊歩道（大谷地区）を井沢が担当した。
3. 本概報の執筆は試掘地点、貝花尾地区を飛高が、大谷地区を井沢が分担執筆し、井沢が編集した。
4. 遺構遺物の写真撮影は飛高、井沢が行い、航空写真的撮影は飛高が行った。掲載の図面は、各調査員作成のものを井沢が製図した。
5. 本書掲載の Fig. 3 の地形図は、席田総合運動公園建設予定地内の遊歩道建設設計圖を利用した。
6. 発掘調査に際しては、補助員の木下洋介君、奥村俊久君、田丸雅之君に協力を得、又、実測には池崎謙二氏（市文化課）の助力を得た。
7. 整理実測については、木下洋介君、吉田富美子さん（福岡大学生）の労を得た。
8. 尚、本概報の中で、第一次概報による既報告分を一部転載した。
9. 遊歩道部分については調査途上路線変更が行われ、貝花尾2号墳と大谷遺跡の一部が保存された。
10. 発掘調査資料の整理については不充分であるため、本報告書の段階で整理報告を行いたい。

本文目次

	本文頁
第一章 はじめに	6
1. 発掘調査に至る経過	6
2. 調査組織	7
第二章 位置と環境	8
第三章 調査概要	10
1. 調査経過	10
2. 試掘地点の概要	10
3. 新立表古墳	11
4. 貝花尾2号墳概要	11
5. 大谷遺跡概要	12
第四章 おわりに	22

挿図目次

	本文頁
Fig. 1 廬田遺跡群と周辺の遺跡（縮尺 1/25,000）	5
Fig. 2 廬田遺跡群第1・2次発掘調査遺跡とその周辺（縮尺 1/5,000）	8
Fig. 3 大谷遺跡地形図（縮尺 1/800）	13
Fig. 4 大谷遺跡遺構配置図（縮尺 1/200）—（折り込み）	15.16
Fig. 5 2・3号住居址（縮尺 1/50）	17
Fig. 6 2・3号住居址出土遺物（縮尺 1/8）	18
Fig. 7 8号住居址（縮尺 1/60）	20
Fig. 8 出土遺物（縮尺 1/4）	20

図版目次

- PL 1 席田遺跡群全景 西より
PL 2 (1) 席田古墳群遠景 西より
(2) 貝花尾 2号墳近景 西より
PL 3 (1) 貝花尾 2号墳伐開後の状態
(2) 貝花尾 2号墳表土除去後の状態
PL 4 (1) 貝花尾 2号墳石室 北西の入口部より
(2) 貝花尾 2号墳石室 南東の奥壁部より
PL 5 (1) 貝花尾 2号墳副葬土器出土状況
(2) 貝花尾 2号墳副葬土器配置復原状況
PL 6 (1) 貝花尾 2号墳直刀副葬状況
(2) 貝花尾 2号墳出土鉄製品
1. 直刀 2. 鉢斧
PL 7 貝花尾 2号墳出土土器
1. 堤版(須恵器) 2. 壺(須恵器) 3. 瓶(須恵器)
4. 有蓋高杯(須恵器) 5. 杯(須恵器) 6. 壺(土師器)
PL 8 (1) 新立表占墳遠景
(2) 新立表古墳石室
PL 9 (1) 大谷遺跡遠景
(2) 大谷遺跡近景(航空写真)
PL 10 大谷遺跡全景(航空写真)
PL 11 大谷遺跡発掘調査地区全景(航空写真)
PL 12 (1) 大谷遺跡 東より
(2) 大谷遺跡 西より
PL 13 (1) 2、3号住居址 西より
(2) 2号住居址内青銅製鋸先出土状況
PL 14 (1) 2号住居址内遺物出土状況
(2) 4、9号住居址 溝状造構 西より
PL 15 (1) 6、7号住居址 西より
(2) 8号住居址 北より
PL 16 大谷遺跡遺物出土状況
(1) 2号住居址内鉄斧出土状況 (2) ピット内土器出土状況
(3) 6、7号住居址内遺物出土状況 (4) 7号住居址内集石
PL 17 (1) 1号土壤
(2) 久保園遺跡遠景(航空写真)

付表目次

本文頁

表 I	大谷遺跡造構表	21
-----	---------	-------	----



Fig. 1 席田遺跡群と周辺の道路 (縮尺 1/25,000)

1. 下白井遺跡
2. 下白井古墳
3. 青木遺跡
4. 成岡遺跡
5. 北ノ浦古墳
6. 北ノ浦遺跡
7. 久保籠遺跡
8. 林崎遺跡
9. 宝鏡尾遺跡
10. 上ノ池古墳群
11. 安居古墳
12. 下月隈古墳群
13. 大神森古墳群
14. 下月隈遺跡
15. 上月隈古墳群
16. 文殊谷古墳群
17. 谷頭古墳群
18. 板付遺跡

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市博多区大字東平尾に位置する市立席田総合運動公園建設予定地内の埋蔵文化財の第2次発掘調査を昭和51年度事業として前年度（昭和50年度）に継続して実施した。第1次概報で述べた通り、当公園予定地は、永い間、米軍彈薬庫として占有されていたため、戦前の席田炭鉱や米軍関係の施設以外には開発が着手されていらず、月隈丘陵の原始・古代を明確にするうえで重要と期待された。第1次調査では、昭和50年度事業として、「サイクリングロード・遊歩道等建設予定地内」の埋蔵文化財の調査を実施した。（席田遺跡群第1次調査概報参照）。第2次調査は、昭和50年度に継続し、「サイクリングロード・遊歩道等建設予定地内」の埋蔵文化財の調査を実施したが、調査途上、工事計画の変更もあって、上記の調査計画の変更と共に、各施設建設予定地の埋蔵文化財の有無の確認調査を行なった。

なお、昭和51年度の、発掘調査に先立って8月ごろ、「野球広場」建設予定地が都市計画局公園建設課より教育委員会文化課との事前協議もないまま、突然工事着工され、貴重な遺跡（久保園遺跡）が破壊されたことは、たいへん惜しまれる。
註 3, PL17-90

第1次調査（昭和50年8月1日～昭和51年2月20日）

調査対称地 サイクリングロードおよび山道（延約320m）

発掘調査地点 貝花尾1・2号遺跡（博多区大字東平尾字貝花尾）

貝花尾1号墳（博多区大字東平尾字貝花尾）

第2次調査（昭和51年10月1日～昭和52年1月24日）

調査対称地 サイクリングロード（延500m）

管理広場建設予定地（2ヶ所）

遊歩道（延1020m）

発掘調査地点 新立表古墳（博多区大字東平尾字新立表）

大谷遺跡（博多区大字東平尾字大谷）

貝花尾2号墳（博多区大字東平尾字貝花尾）

2. 発掘調査の組織

調査委託者 福岡市都市計画局公園建設課

調査主体者 福岡市教育委員会

調査担当者 福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係

事務担当 志鶴幸弘（主幹）、清水義彦（課長）、三宅安吉（係長）、田武勝利、木村義一、窪田千恵子

発掘担当 飛高恵雄（新立表地区、貝花尾地区、中尾地区、堤ノ上地区）、井沢洋一（大谷地区）

調査協力者 西村浅吉、藤木 進、古賀益雄、山根正人、川崎律夫、竹田 清、平山文則、関 政子、奥 朝子、関加世子、奥ヒサ子、関スマ子、安川栄代、安川初枝、山内タツ子、中山政子、田原豊子、鶴田サヨ子、稻永トモミ、稻永初子、国崎キヨ子、齊藤ツギ子、長谷津ミエ子、百済恵子、宮本ケイ子、宮木ヒサ子、吉岡幸江（作業員）

山崎紀子、本田悦子、関 悅子、奥 和子、宇美富美子、

百武謙二、木下洋介、田丸雅之、奥村俊久（補助員）

柳田紳孝、塩屋勝利、折尾 学、山崎純男、力武卓司、柳沢一男、二宮忠司、池崎謙二、浜石哲也、山崎龍雄、後藤 直、沢皇 臣、横山邦輔、山口謙治（市文化課技師）

整理補助員 木下洋介、田丸雅之、松尾 修、片岡ひとみ、藤たかえ、松尾陽子、吉田富美子

以上のほか、古賀恵美子さん、福岡大学生の末吉一文君、山内正美君の協力を得ました。また、発掘調査期間中並びに整理作業におきまして各方面、各分野の方々の暖いご援助をいただきました。改めて感謝の意を表します。また、今後の席田遺跡群の調査にご指導とご助言を賜わりたいと存じます。

第1次調査部分

第2次調査部分

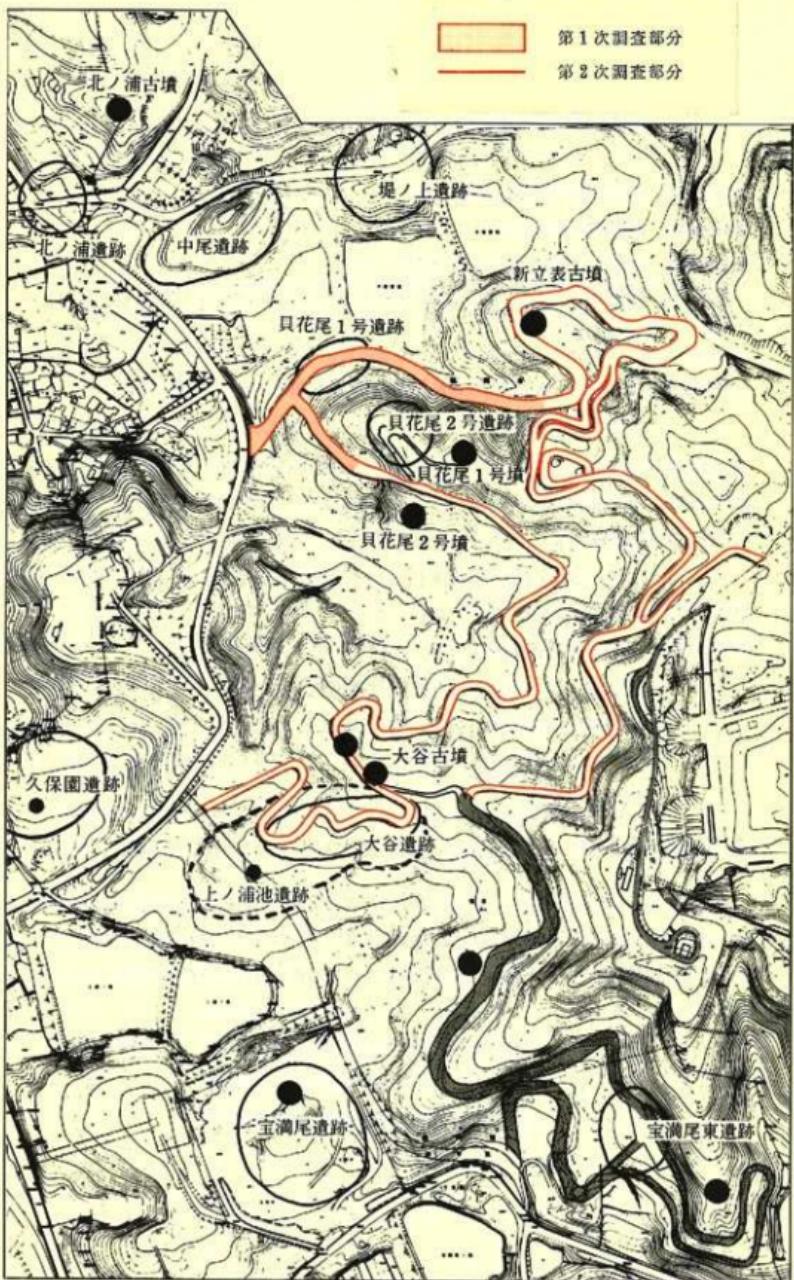


Fig. 2 席田遺跡群の第1、2次発掘調査遺跡と周辺の遺跡 (縮尺 1/5,000)

第Ⅱ章 席田遺跡群の立地と環境

福岡平野は東に三郡山地、南から西にかけては背振山地が横たわり、北方には博多湾が広がる面積約2406m²の沖積平野である。福岡沖積平野を平尾丘陵（最高は標高100mの鴻ノ巣山）によって東西に分かれ、東部を福岡平野、西部を早良平野と呼ぶこともある。

さて、福岡平野の東を限る三郡山地より派生した大城山（標高410m）の山麓に、南東から北西に延びる古第三紀層によって形成された月隈丘陵がある。席田遺跡群は、この月隈丘陵の北端に近い博多区大字東平尾および雀居にかけての地区に分布する。その位置は福岡空港滑走路中央部の東側にあたり、丘陵の現状は雜木林である。

席田遺跡群の分布する一帯は約88mの標高をもつが、ほぼ南北に山陵線が走り、この東側は皿米軍の弾薬庫建設に伴う掘削等により旧地形を留めていない。また、丘陵には数多くの谷が切り込まれており、この谷が谷水田として利用されたことが想像される。この月隈丘陵は、西方向に舌状に突きだした標高20~30mの台地を多く形成する。月隈丘陵の多くの遺跡がこの舌状台地に存在するが、今日まで発掘調査された例は少なく、金隈遺跡、宝満尾遺跡等の調査にとどまっている。両遺跡の調査によって月隈丘陵の弥生時代初現および月隈丘陵における中期から後期の墓址の在り方を提示してくれることになったが、月隈丘陵の歴史的変遷および福岡平野における位置づけは今後の課題であった。月隈丘陵における遺跡の初現は金隈遺跡の裏柏墓址に板付Ⅰ式併行時期の埴輪を見い出されるように、弥生時代前期に始まる。この時期の遺跡は少なく、宝満尾においては最も古い形態をもつ財蔵穴が発見され、前期前半に既にこの地に集落が営まれたことを示している。中期に入ると、御笠川によって形成された沖積平野に面して突き出した10~30mの舌状台地には急激に遺跡が増加し、月隈丘陵の北端に大字稻城所在の下臼井遺跡、更に南に順次、青木遺跡、東平尾遺跡、宝満尾遺跡、宝満尾東遺跡、林崎遺跡、北ノ浦遺跡等の裏柏墓が報告されている。その数は前期に比べると飛躍的に増加している。その中期遺跡の増加の一因は地形的に恵まれたことで、広い平野を抜け、多くの切れ込んだ谷をもった標高20~40mの台地の連続することがあげられる。前期~中期における初期農耕は谷水田の利用が考えられ、農耕技術の淘汰によって、御笠川による沖積平野へ進出し、収穫の安定増加が得られるようになったこと。更には背後に丘陵地帯をひかえ、動物性食物にもめぐまれたことによる生活の安定といった好条件が想像されよう。後期の遺跡はわずかしか知られておらず、宝満尾遺跡および金隈遺跡の墓址にみられるが、生活址の明らかな発見はなかった。古墳時代に於いては月隈丘陵上に存在する持田ヶ浦古墳群、堤ヶ浦古墳群、席田周辺では北ノ浦古墳、貝花尾1・2号墳、宝満尾1号墳、上ノ池古墳が知られている。今後遺跡数は増加するものと考えるが、とりわけ知られていない集落址の調査が弥生時代中期の生産の増加

と、爆発的な人口の増加における経済的矛盾がいかに解消され、席田郡形成への社会的、政治的な過渡期の徵候を明らかに示すものと考えられる。古墳時代以降については、久保園遺跡で調査されているだけで、席田郡の所在実体についてもまだ今後の研究、調査をまたねばならない。この地域の遺跡の分布については宝満尾遺跡調査報告、席田第1次調査概報に詳しいので参考にされたい。

第Ⅲ章 席田遺跡第2次調査概要

1. 調査経過

昭和51年8月1日より前年度に引きついで、サイクリングロード部分の第2次調査に着手し、新立表地区（入口より約400m）にてロード沿いの古墳（新立表古墳）の調査を11月26日まで行なった。その後、公園建設課の設計変更もあって、遊歩道部分の建設を急ぐことおよび管理広場建設予定地の試掘調査の依頼があったため、調査を2班に分けた。「遊歩道」の予定地については入口部分に相当する大谷地区（大谷遺跡）と、出口部分に近い貝花尾地区（貝花尾2号墳）の調査を併行しておこない全調査を昭和52年1月24日に終了した。以下に試掘調査地点ないし本調査を実施した地点を列記する。

- ① 新立表地区（サイクリングロード建設予定地内）一新立表古墳 本調査 10月18日～26日
- ② 中尾地区（管理広場建設予定地内）試掘調査 11月1日～18日
- ③ 堤ノ上地区（管理広場建設予定地内）試掘調査 11月19日～30日
- ④ 貝花尾地区（遊歩道建設予定路線内）一貝花尾2号墳 本調査 12月4日～24日
- ⑤ 奥林地区（遊歩道建設予定路線内）試掘調査
- ⑥ 大谷地区（遊歩道建設予定路線内）一大谷遺跡 本調査 10月15日～1月24日

以下に概要を述べ、今後の整理報告へのご指導ご助言を賜わりたい。

2. 試掘地点の概要

(1) 中尾遺跡（博多区大字東平尾字中尾）

遺跡は現在、東平尾から柏原郡志免町へ抜ける道路によって切断されているが、もともとは北の浦の丘陵の南西へ延びる一支丘であった標高10m～20m丘陵上に位置している。丘陵の稜線上にそってトレンチを設定し試掘した結果、明確な遺構は検出できなかったが、弥生時代中期の土器の破片を得た。大型の変形土器の破片が含まれているため、窓塗器遺跡の存在も考えられる。（第1次調査概報参照）

(2) 堤ノ上遺跡（博多区大字東平尾字堤ノ上）

遺跡は、中尾遺跡の東方 100m 前後の北ノ浦の丘陵の一文丘上に位置するが、中尾遺跡と同様に道路によって切断されている。試掘の結果、大形の壺形土器とそれらを囲む状態で置かれたと考えられる位置から数個の小形の壺形土器が出上した。（第1次調査概報参照）

3. 新立表古墳（サイクリングロード）

第1次発掘調査が行なわれた貝花尾丘陵の北側に、谷を挟んで南東から北西へ延びる丘陵の中腹部のサイクリングロード建設予定路線内の丘陵南側斜面の標高40m前後の地点で須恵器の破片を数点ほど採集したため、上方の尾根上を精査した結果、上部等は破壊されてはいたが腰石が残された古墳の存在を確認した。

当古墳は、南西の丘陵斜面に向って開口する両袖の横穴石室を内部構造として有す古墳？である。墳丘は直径10m以上を計るようであるが、正確な數値は墳丘の高さとともに不明である。
(第1次調査概報参照)

4. 貝花尾2号墳（遊歩道）

公園建設課が遊歩道の一部の設計変更を行なったため、再度、新路線内の樹木、下草の伐採と埋蔵文化財の有無確認調査を実施した結果、貝花尾1号墳の立地する貝花尾丘陵の南側斜面の中腹の標高30m前後のところに、東西200m、南北50mにわたって比較的平坦な地形が認められた。当初は、この西側近接地に平尾炭鉱時代に住宅があったため、その関係で削平されたものと理解していたが樹木の伐採の結果、この平坦地の西部で、石室の一部と思われるものが確認された。墳丘は当初の形状をまったくとどめていなかったが、精査したところ横穴式石室であることがわかった。

墳丘の形状は不明であるが、少なくとも直径10m以上の規模を有したであろう。石室は主軸を N45°W にとり、貝花尾丘陵の陵線にはば平行である。石室の入口は南東部に壁石がなく閉塞を思わせる部分があるため、第1次発掘調査概報では南東に考えたが、この部分に直刀の副葬が認められたため、この反対側の北西部の壁石の切れた箇所ではないかと考える。石室の平面は、長さ約2.8m、幅約2.5mである。石室の高さは不明であるが、盗撃口の北側と石室内に転落していた長さ約1.5m、幅約0.7mほどの扁平な相似た石が天井石であったとすれば、壁石はかなりの持ち送りを必要とし、相当の高さがあったものと考える。床面は盗掘された部分も含めて全面に角礫が敷かれていたものと思う。石室中央部に1個の円礫が敷かれているのは何か暗示的であるが、その性格は不明である。

副葬品の内、土器類は全て奥壁に向って右側の特に入口に入ったすぐ横に集中して置かれて

いる。それらは、奥から順に須恵器の壺身、土師器の壺、須恵器の有蓋高壺、翫、壺、提瓶の6点である。これら土器類の更に奥で刀子および鉄鏃の残片、石室中央部の円礎の南側から鉄斧、また、奥壁に接して直刀の副葬が認められた。

以上が貝花尾2号墳の概要であるが、この平坦地全域にわたって弥生時代の遺物包含層および生活跡と思われるものが認められた。

5. 大谷遺跡（遊歩道）

今回の調査では、遊歩道入口から約100m入った地点の路線基準杭、^木8～^木14までの約80mを約10m幅で発掘調査し、^木15～^木41までの約260mを試掘した。また、尾根上では試掘の結果、8基の古墳が存在することを確認した。一方、調査途上で路線変更のあった部分についても随時試掘調査を行ない、埋蔵文化財の有無を確認した。

立地、月隈丘陵から派生し西方へ突出した標高50～55m前後の丘陵は、更に西・南方向に幾つかの緩やかに傾斜する台地を分岐する。遺跡はこの尾根から南北方向に分岐した台地の分岐点および平坦部に存在する。この台地の両側には谷頭を形成し、深い谷となっている。この台地の南北方向に連続した標高10～20mの位置には、大谷遺跡と本來同一のものと考えられる上ノ浦池遺跡が存在する。上ノ浦池を隔てた東南の台地上には、かつて席田中学校建設に伴って調査された宝満尾遺跡が存在した。台地は、路線杭^木8～^木10の約40mまでは標高30～45mを保つ狭長な平坦部を形成するが、^木11～^木14にかけては、テラス状の張り出しを幾つか有した緩傾斜面となっている。遺跡は生活址を主体としており、住居址、溝状構造、土塙、柱穴多数を検出した。住居址は標高30～35mほどの平坦部および緩傾斜地に設けられるが、斜面のテラス状の張り出し部分にも多く作られているようである。また、標高45～50mの尾根南斜面でも住居址が確認された。この台地は頁岩質の風化土および二次堆積層が厚く、住居址などは堆積層に切り込まれたものもあって遺構の検出に困難をきわめた。

遺構

1号住居址

平面形は方形を呈するが、二次堆積層に築かれているので、北側コーナーのみしか存在せず規模は不明。壁現存高は17cmを測る。この住居址の上部には黒色粘質土が堆積しており、この層中より弥生時代後期の土器が出土している。

2号住居址 (Fig. 5, PL 13-①)

3号住居址を切って作られたもので、長方形プランを呈し、長軸5.8m×短軸4.3mを計る。

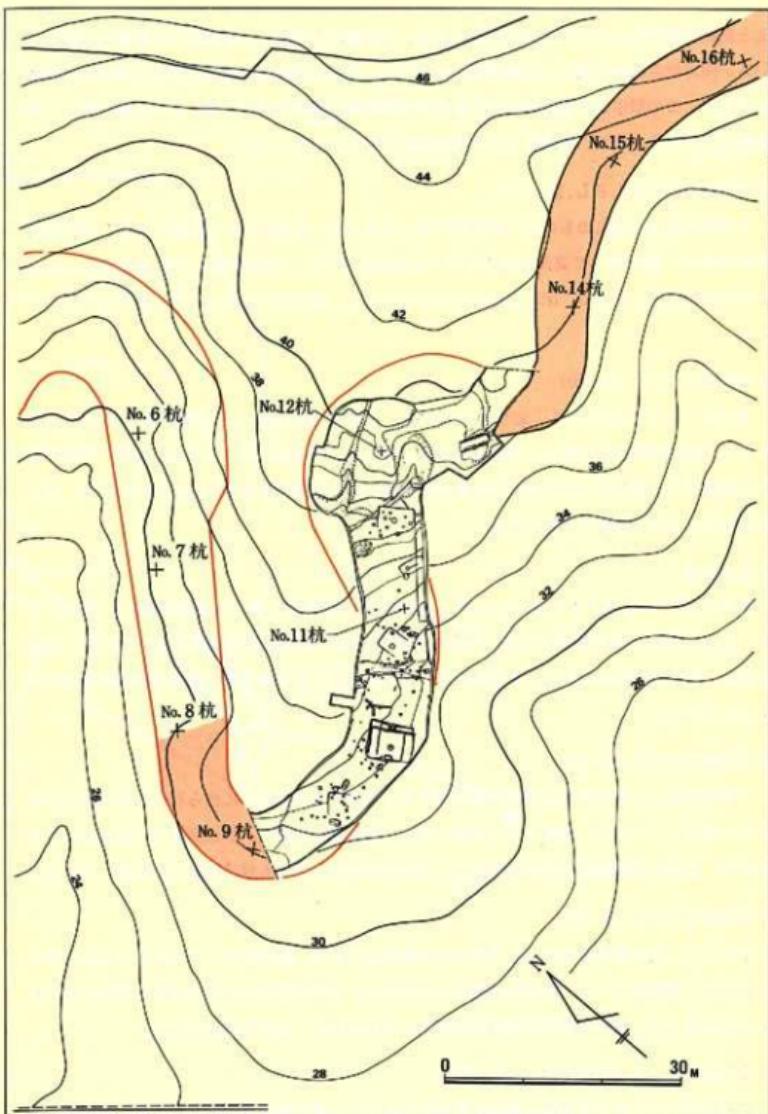


Fig. 3 大谷遺跡地形図 (縮尺 1/600)

—— 遊歩道計画路線
■ 発掘調査部分

北と南側の壁に沿ってベッドを有する。また、中央部にがを配し、西側壁下に貯蔵穴を設けている。現存壁高55cmを測り、周溝を回らせてある。この住居址の上部にも黒色土層が厚く堆積しており、この層中より弥生時代後期後半の西新町式土器が出土したが、この土器に併し、青銅鋤先片(Fig.6)が出土。また、同溝内より小型の鉄斧(Fig.6)が出土している。

3号住居址 (Fig.5, PL.13-①)

2号住居址より前出のもので、長方形プランを呈する。長軸5.4m×短軸4.7mで、現存壁高30cmを測る。壁に沿って周溝を回らすが、全体に及ばない、東側壁下にPitを設ける。ベッドは北側壁に沿ってある。床との比高差は90cmである。弥生時代後期の土器と鉄斧が出土している。

4号住居址 (PL.14-②)

長方形プランを呈するが、北半分のみ存在。上部に暗黄褐色土の堆積がみられた。短軸2.7m、現存壁高10cmを測る。同溝は部分的に見られるが全体にめぐらしい。炉は、中央西寄りに位置する。壁に沿って女竹の炭化物が床に敷かれた状態で検出された。柱穴は不明。出土遺物は細片のみで時期は不明である。

5号住居址

長方形プランを呈すると思われるが、これも二次堆積層に掘り込まれており、残りは想い。この上部にも黒色粘質土が厚く堆積し、多くの弥生時代後期の土器を含んでいた。短軸3.27m、現存壁高24cmを測る。東側壁下にくの字形のベッドを有する。土器は弥生時代後期のものと考える。

6号住居址 (PL.15-①)

7号住居址より先行するもので、長方形プランを呈するが傾斜面に作られたため東側半分のみしか残存していない。長軸2.87×短軸4.6m、壁高30cmを測る。炉は東寄りにあるものと思われる。遺物は西新町式土器を多数出土。この住居址の上部にも厚く黒色土が堆積していた。

7号住居址 (PL.15-①)

やはり、二次堆積層を切り込んで作られた住居址である。長方形プランを呈するものと考えられるが、東側のコーナーのみしか残存していない。6号住居址との切合部分に剖面と思われる石組があった。遺物の時期は西新町式相当と考えられる。玄武岩の石斧出土。

8号住居址A・B (Fig.7, PL.15-⑤)

傾斜面のテラス状の張り出し部分に作られたもので、建て替えを行なっている。長方形プランを呈するものと考えるが、東側半分しか残存していない。壁高88.8cmを測る。東側にベッドを有し、壁下およびベッドに沿って溝をめぐらす。炉は中央寄りと思われる部分にある。柱穴

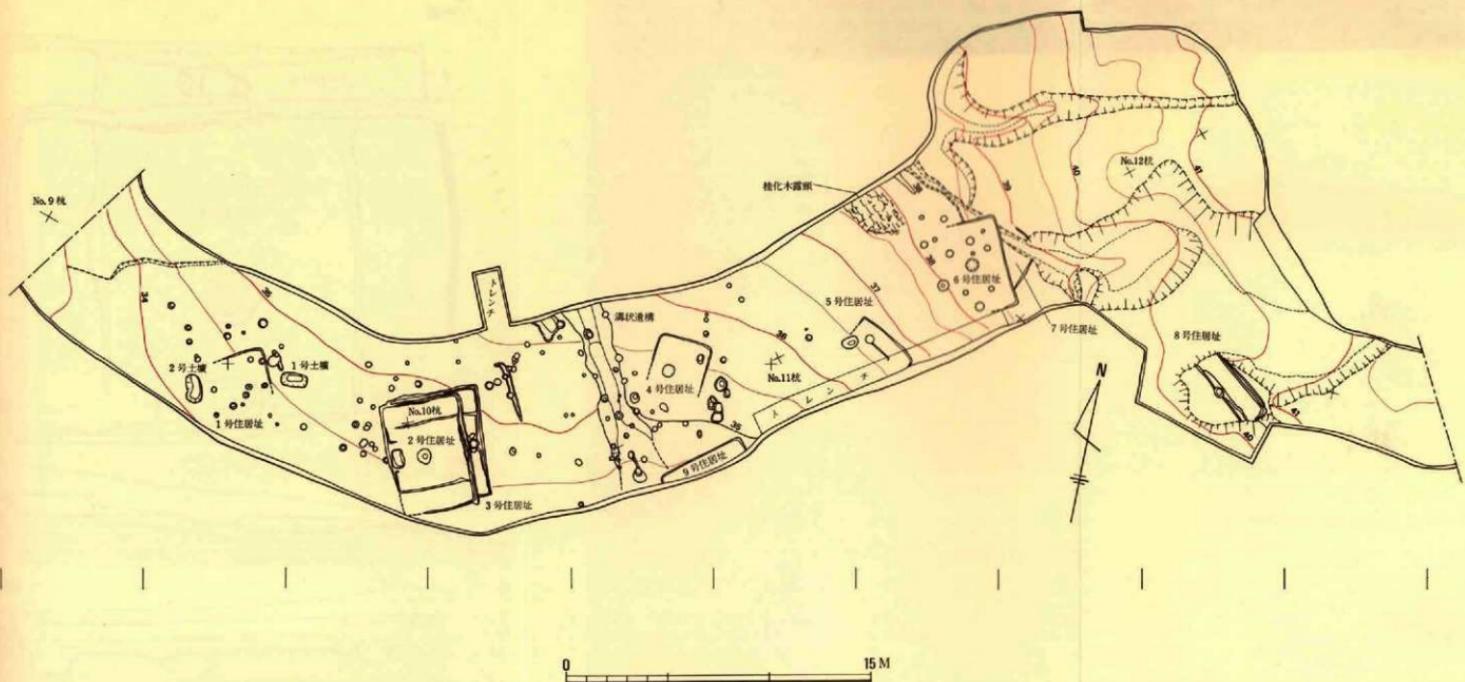


Fig. 4 大谷遺跡遺構配置図 (縮尺 1/200)

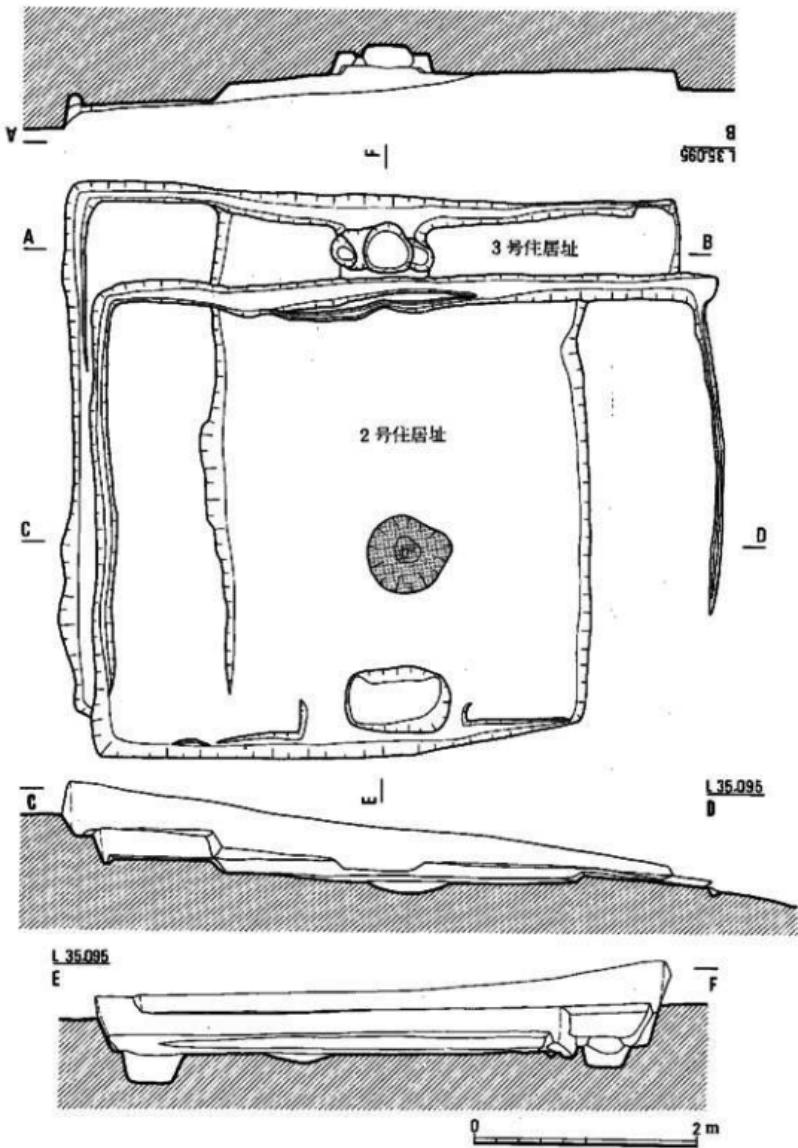


Fig. 5 2、3号住居址 (縮尺1%)

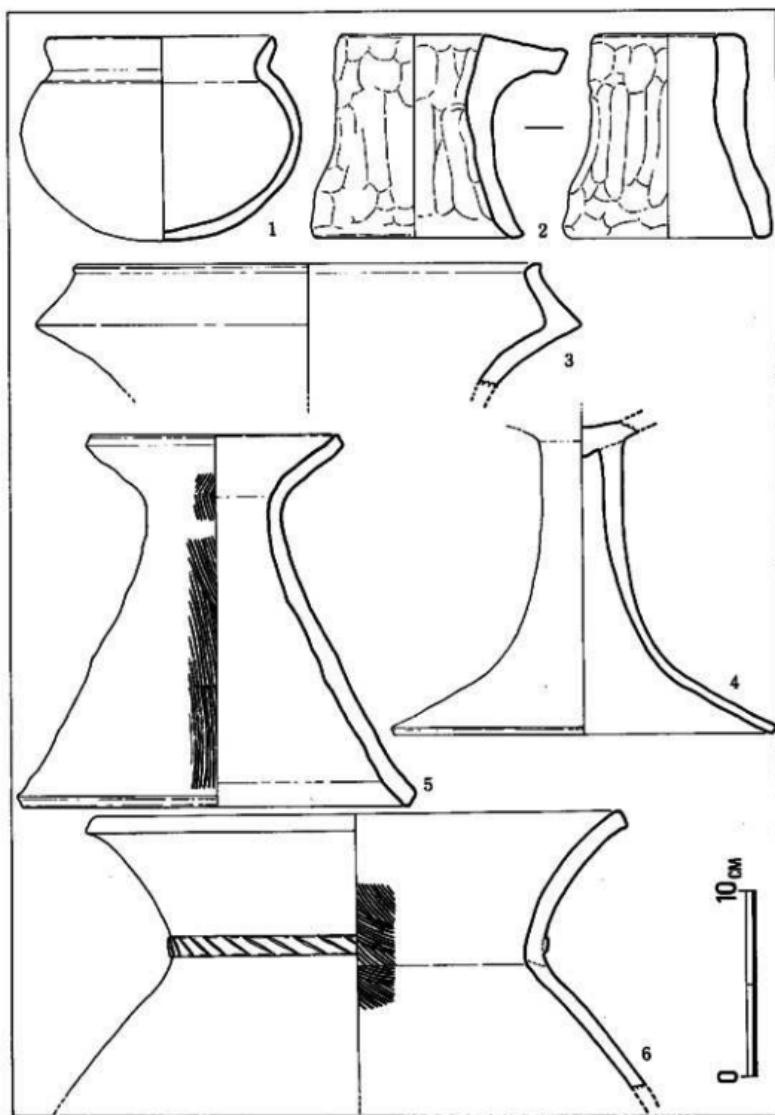


Fig. 6 出土遺物 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

1.—Pit内 2.、4.、5.、6.—2号住居址
3.—3号住居址内

は1本のみ確認した。

9号住居址 (P.L.14-⑨)

縁線にかかった一部分のみを調査した。長方形プランを呈するもので、短軸4.3m、壁高31cmを測る。遺物は少ない。

※その他、住居址の周溝と思われるものが2、3号住居址の東側にみられた。

溝状遺構

幅180cm、深さ20cmを測るが、傾斜するにしたがって消失する。丘尾切削の溝と考えられるが、比較的浅く遺物はない。この溝に沿って多くのPitが掘られている。用途は不明。

1号土壙 (P.L.17-①)

隅丸長方形プランを示し、底面も同形で東側がやや狭くなる。長さ250cm、幅180cm、深さ70cmを測る。覆土より弥生時代石歛2個出土。

2号土壙

不整形のプランを示し、長さ140cm、幅80cm、深さ40cmを測る。

遺 物

遺物は、弥生時代中期後半の土器から出土し、若干古墳時代の土師器も含んでいるほか、須恵器も採集されている。住居址等の遺構に伴うのは弥生時代後期前半から後半の西新町式土器に至る時期で、住居址もその時期を2期に区別することが可能なようだ。上器の他には、青銅製鎌先が2号住居址の覆土中より出土し、西新町式土器に伴うものと考えられる。この2号住居址からは小形の鉄斧も見つかっている。また、弥生時代後期に伴うと思われる小形の石庖丁の他、始刀の石斧も出土している。基準杭N16の地点に設定したトレンチからは馬具とみられる金具が出土しているが、これは尾根上の古墳が削平された際、転落したものと考えられる。

＜まとめ＞

遺構は住居址を主体としており、下方の上ノ浦池遺跡は大谷遺跡と同一構成をなすものと考えられる。立地的には、西側に御笠川による沖積平野を控えていたながらも、やや奥まった高い位置に存在し、しかも丘陵、台地の南斜面のテラス状の張り出し部分に住居址を作るなど特異的である。住居址はほとんど切合い関係をもち、建て替えがあったことを示しているが、その配置はほぼ等間隔を保っている。時期的には弥生時代後期前半から後半と考えられ、谷を隔てた宝溝尾遺跡の土壙墓群は時期的に相似するところから、この集落に直接的に結びつく墓址と考えてもよいであろう。また、これと併せて、住居址の特異的な立地は、弥生時代後期における北部九州の弥生時代社会の変動とも関係するのかもしれない。

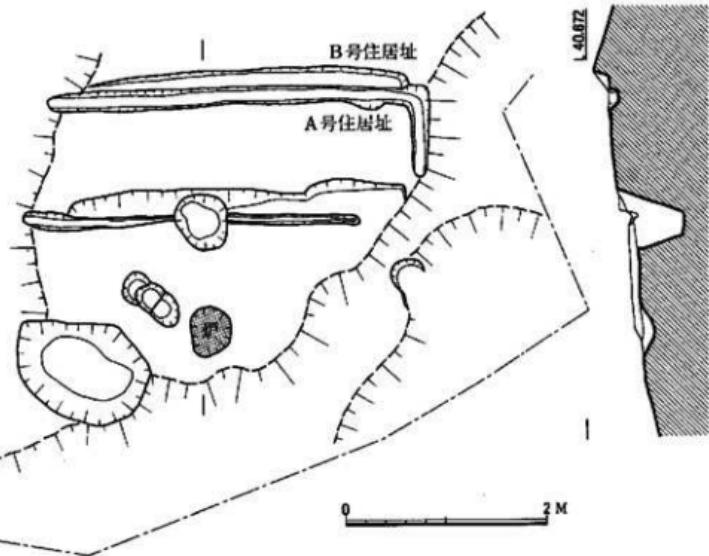


Fig. 7 8号住居址A・B (縮尺1/6)

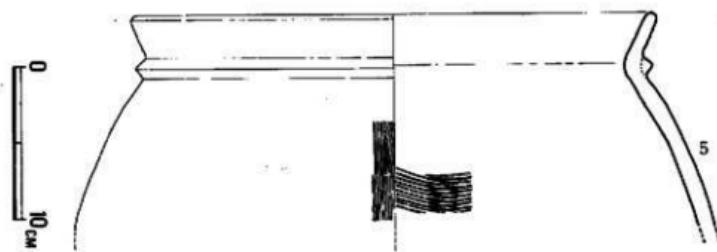
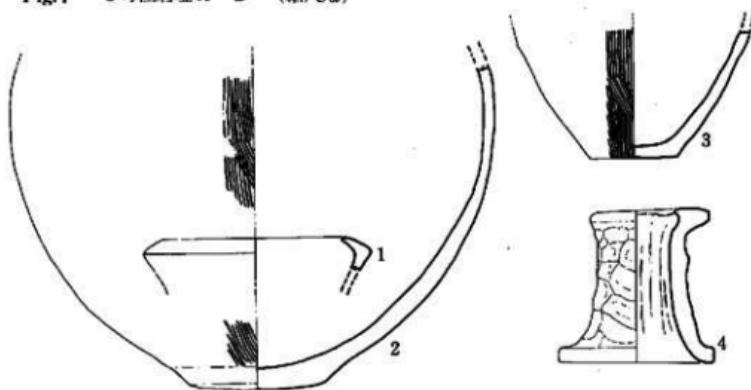


Fig. 8 出土遺物 (縮尺1/4)

1. 1号住居址内 2.3. 2号住居址内
4.5. 6号住居址内

表 1. 大谷遺跡遺構一覧表

住居址番号	プラン	計画(m)現存値	壁高(深さcm)	ベッド	備考
1号住居址	方形?	約2.07×2.87	17cm		北側コーナーのみ残存
2号住居址	長方形	4.2×5.6	55cm	東、西壁ベッド	3号住居址を2号住居址が切る
3号住居址	長方形	4.7×5.4	30cm	西壁にベッド	2号住居址の壁上より、陶器器類を 多く出土
4号住居址	長方形	2.7×2.2?	10cm		南側をカットされる 南側汚りに泥、地下に沿い炭化物
5号住居址	長方形	3.27×1.87	24cm	北側壁ベッド (く字形)	西側をカットされる
6号住居址	長方形	4.6×2.3?	30cm		西側をカットされる。炉は真中寄り
7号住居址	長方形	2.07×2.87	18cm		7号が6号を切る。北側のコーナーのみ残存
8号住居址A	長方形	4.07×2.87		北東壁にベッド	真中に炉、遺物少なし
B		3.27×2.87	38.3cm		A号がB号より新しい
9号住居址	長方形	4.3×1.07	31cm		一部のみ調査
1号土塙		1.3×2.5	70cm		打製石器を含む
2号土塙		0.8×1.4	40cm		

- ※ 注 1. 「宮田遺跡群第一回調査概報」福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集
1977年
2. 昭和52年度発掘調査。現在資料整理中。福岡市教育委員会
3. 「金原遺跡第一回調査概報」福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集
1970年
- 「金原遺跡第二回調査概報」福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集
1971年
4. 「宝満尾遺跡」福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告第28号 1974年
5. 「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表(総集編)」福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1971年
6. 「持田ヶ浦古墳群1、2号調査報告」福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集 1971年

第IV章 おわりに

席田遺跡群の発掘調査は昭和50年に開始され、本年には第4次調査が予定されています。年々新しい遺跡の確認や新しい事実が掘り起こされ、月隈丘陵の歴史が明らかになりつつあることは頗る嬉しいことですが、その反面、常に開発行為による遺跡の消滅という高い代償によってです。席田総合運動公園計画の基本設計によれば、緑の保全を強く唱えており、また、関係各課のご理解によって幸いに幾つかの遺跡が残ることになりましたが、それはあくまでも工事に差しつかえのない部分であって、将来の社会教育的活動に供するほどの現状保存とはなっていません。福岡市の大規模開発は年々増加を辿っており、来年度は景気刺激のためもあって公共事業の増加も著しく、都市化は更に進むでしょう。そうした中で、自然景観に手を加えず、広い面積を緑地として保存していくこと、更にはその中に文化財を保存し、将来の活用に供することができるならば、我々は将来に多きな遺産を残すことになるでしょう。人間の社会がいかに科学的に進歩したとはいえども、その生活の根本は自然界に頼らざるを得ず、また、文化財は我々人間社会の歴史であるとともに生活史でもあり、将来の人間社会への警鐘ともなり得るを考えます。今後、文化財の調査が単に学術的範囲に終始することなく、広範囲の方々に理解し、活用いただけるような資料として整理、保存していきたいと考えます。

尚、中秋から嚴寒にかけての調査期間中、地元の方々、或いは作業員の方々には心暖く調査にご協力いただきました。改めてお礼申し上げます。

昭和58年3月16日

図版



大谷遺跡発掘調査風景 昭和51年10月





麻田漁港群全貌
(航空写真)



1) 席田古墳群遠景 西より



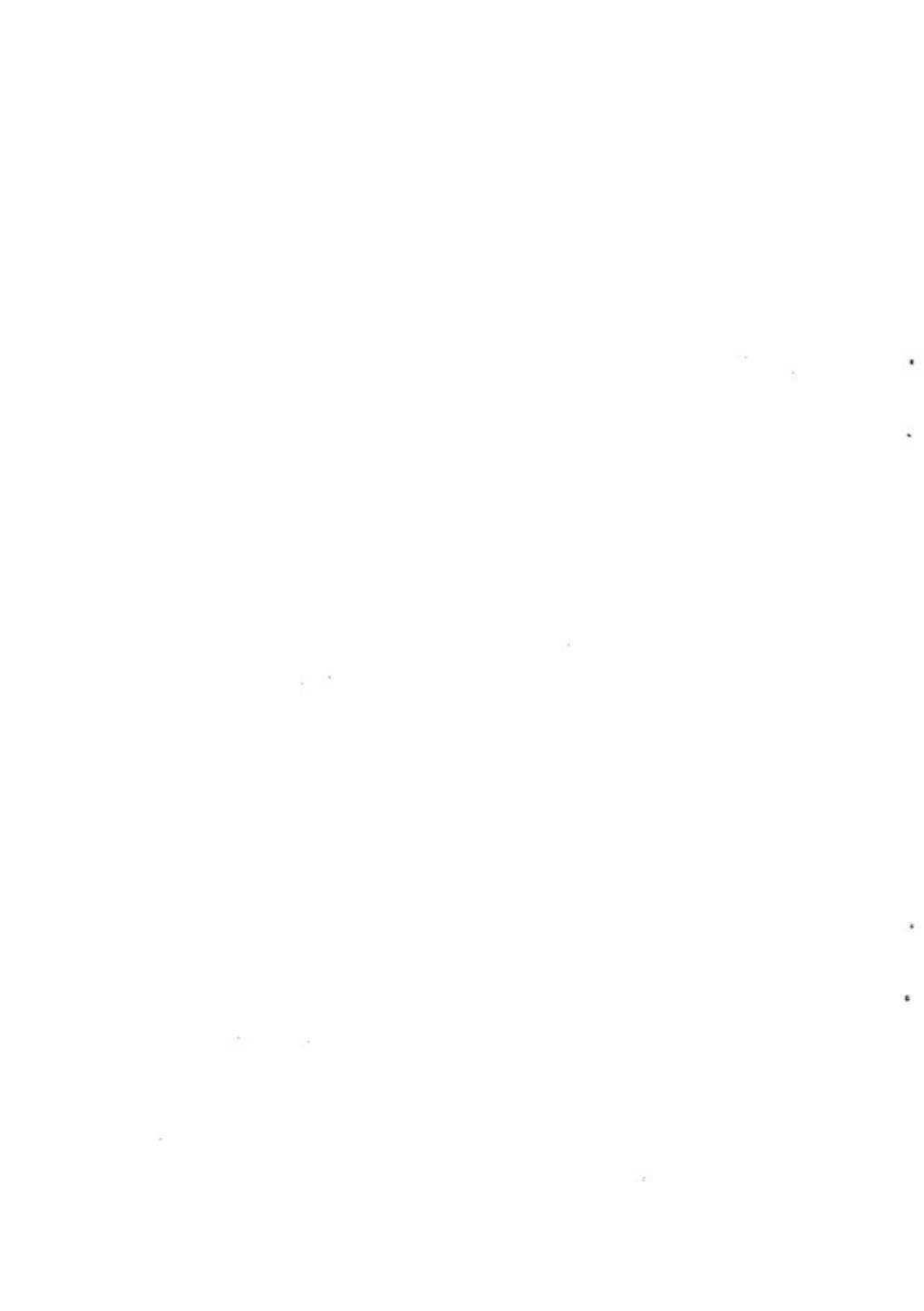
2) 貝花尾2号墳近景 西より



(1) 貝花尾2号墳伐開後の状態 南東より



(2) 貝花尾2号墳表土除去後の状態 南東より

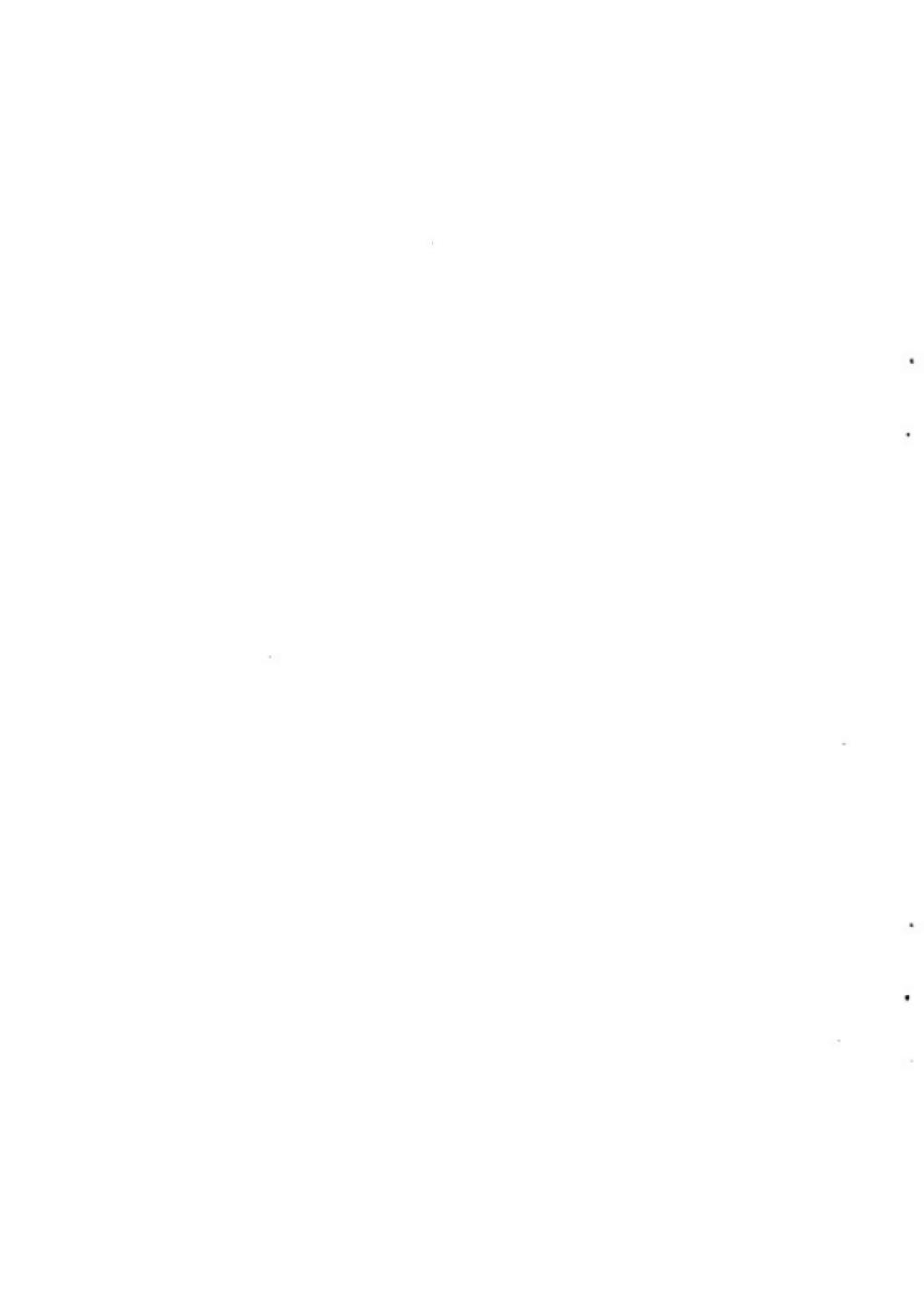




(1) 貝花尾2号埴石堂 北西の入口部より



(2) 貝花尾2号埴石堂 南東の奥壁部より

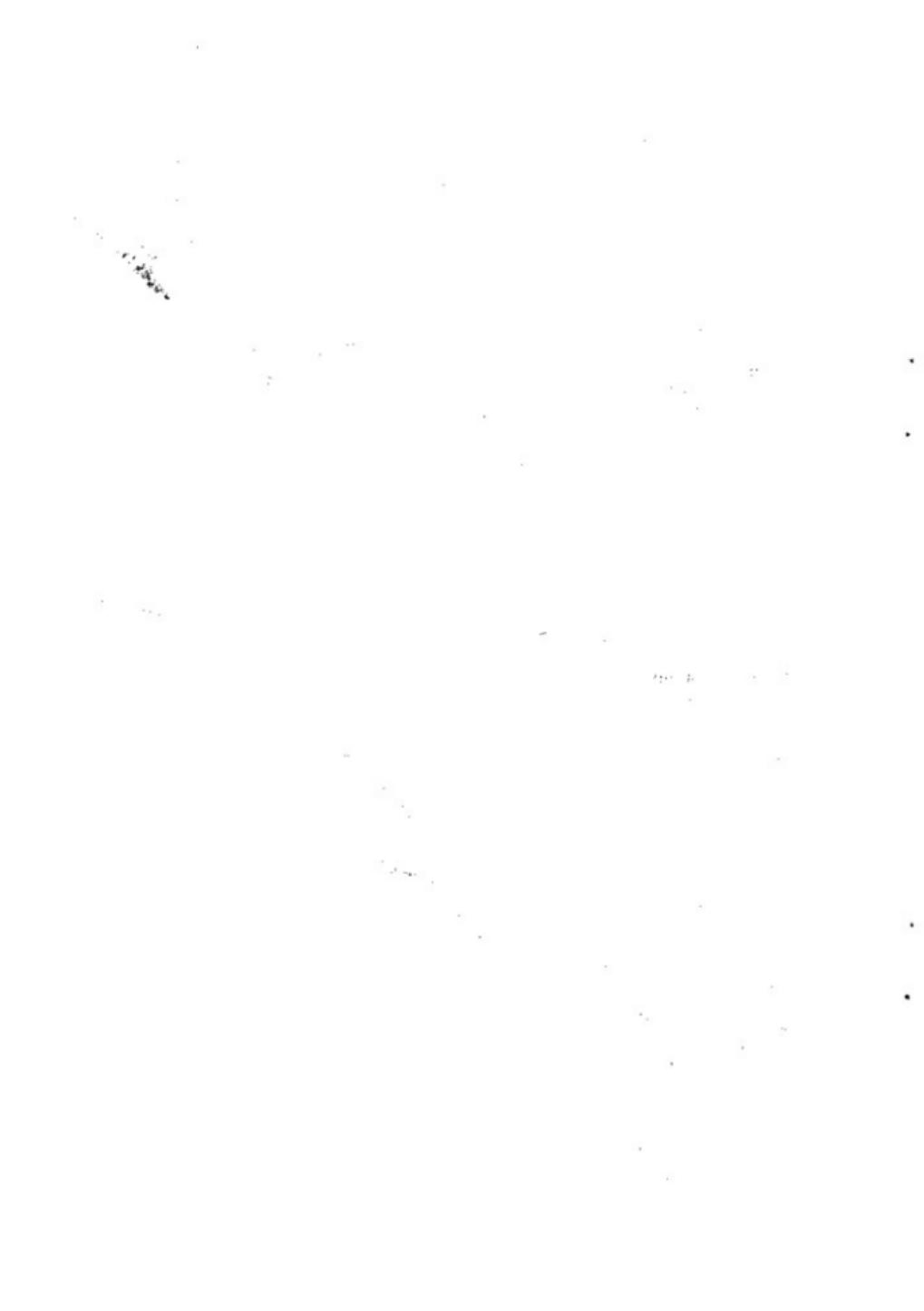




(1) 貝花尾2号墳 副葬土器出土状况

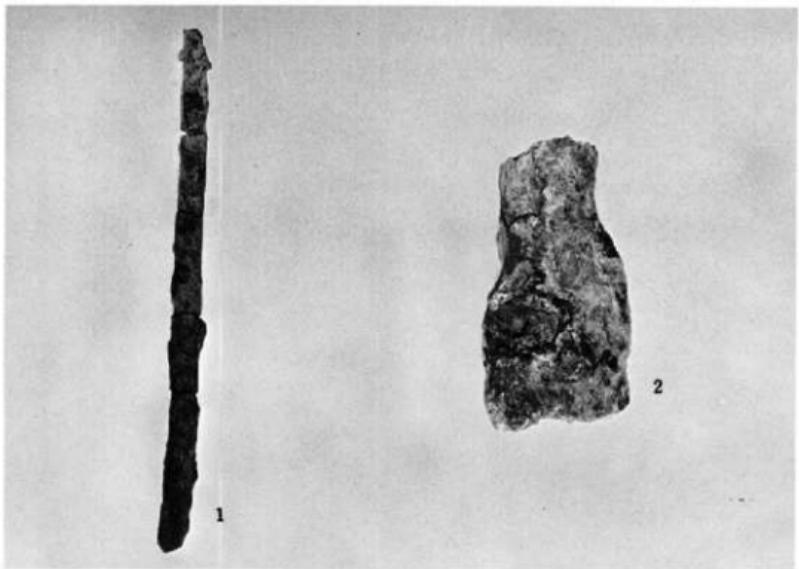


(2) 貝花尾2号墳 副葬土器配置復元状况



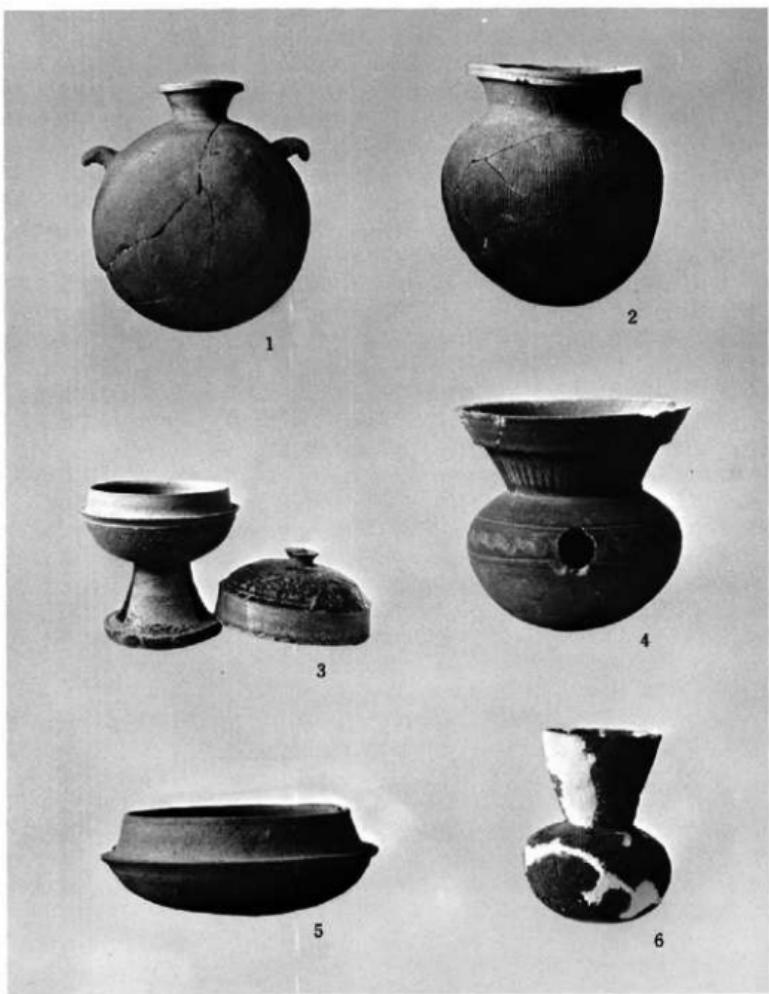


(1) 貝花尾2号墳 直刀副葬状況



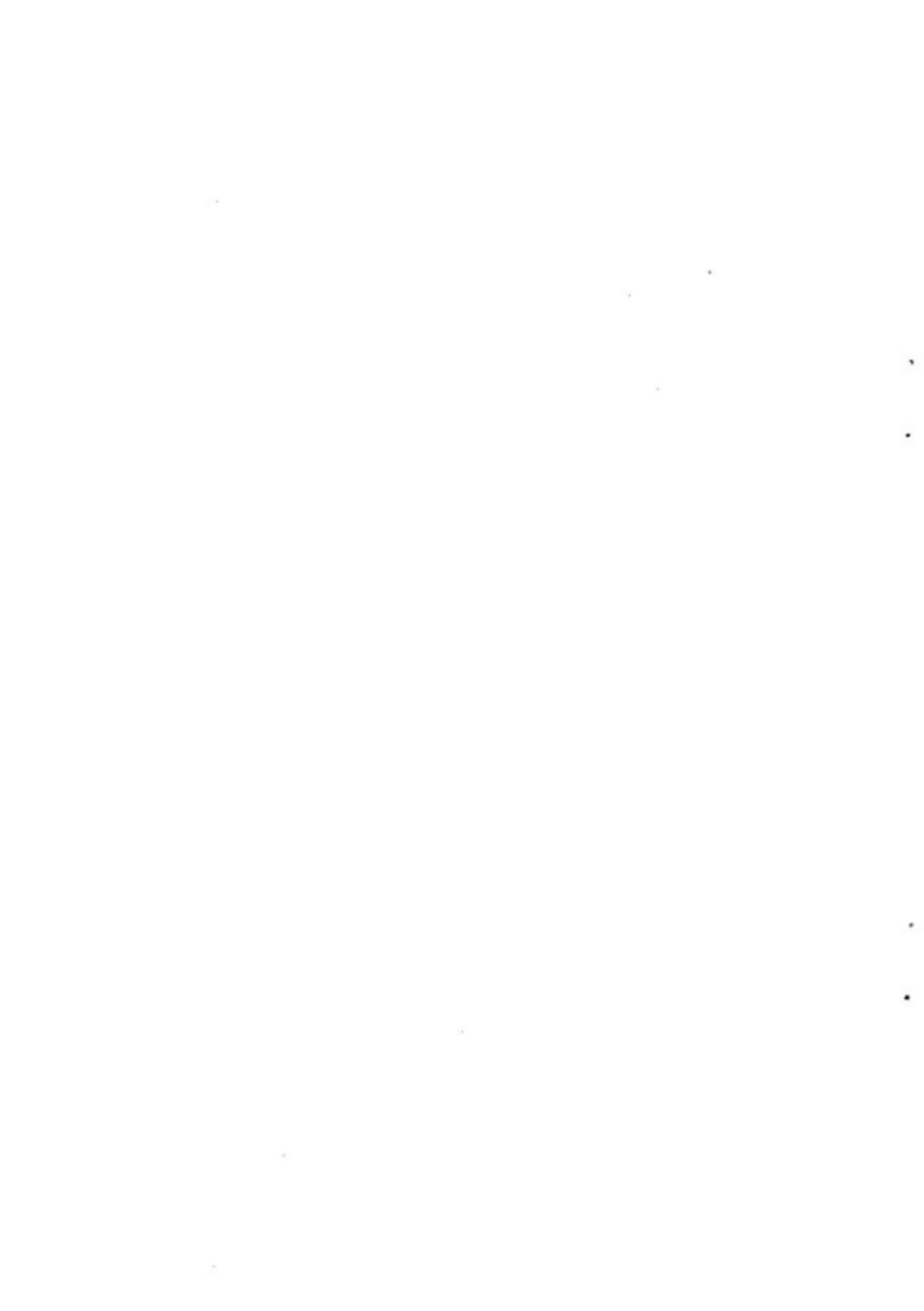
(2) 貝花尾2号墳出土鐵製品 1. 直刀 2. 鐵斧





1. 須惠器 提瓶 器高23.5cm 2. 須惠器 壶 器高21.5cm
3. 須惠器 有蓋高坏 器高13.9cm 4. 須惠器 跖 器高10.5cm
5. 須惠器 坏 器高4.1cm 6. 土師器 壶 器高17.5cm

貝花尾2号填石室内出土器

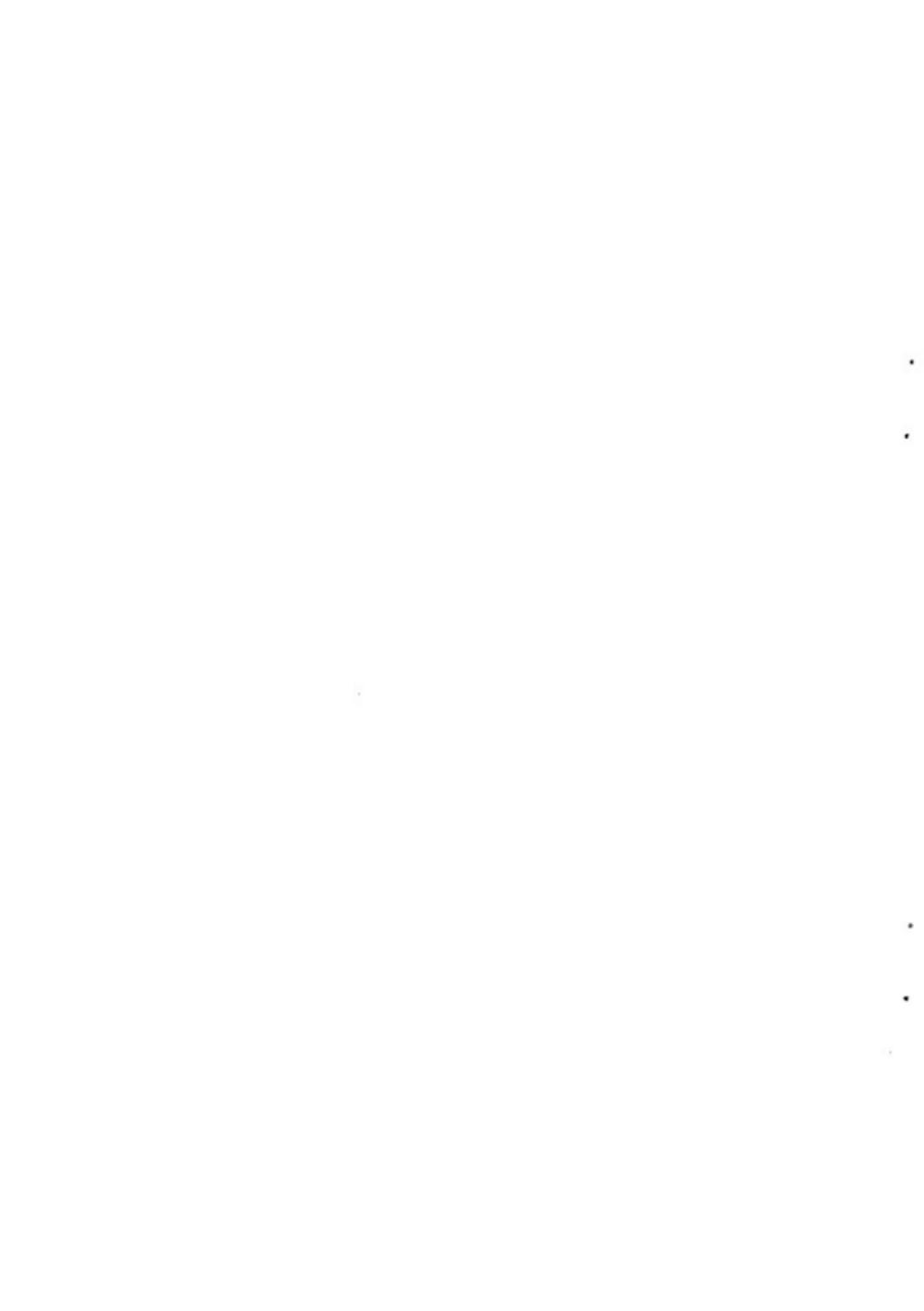


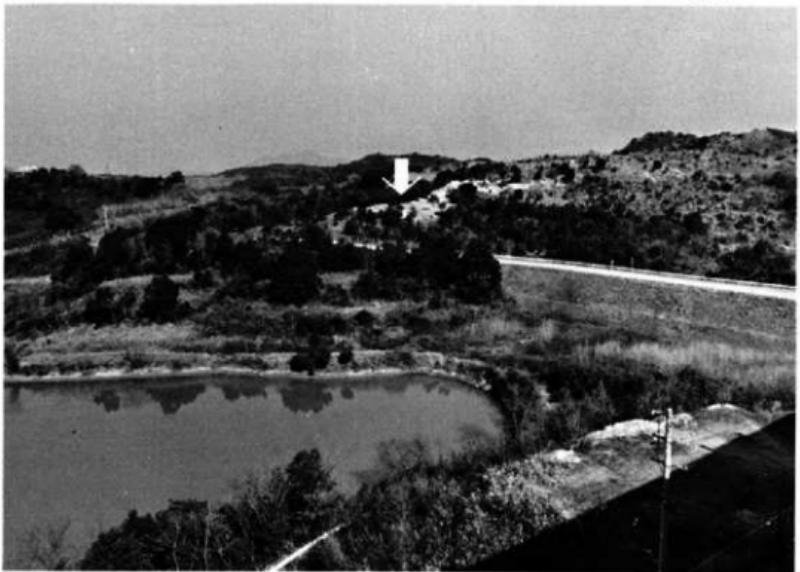


(1) 新立表古墳遠景



(2) 新立表古墳石室

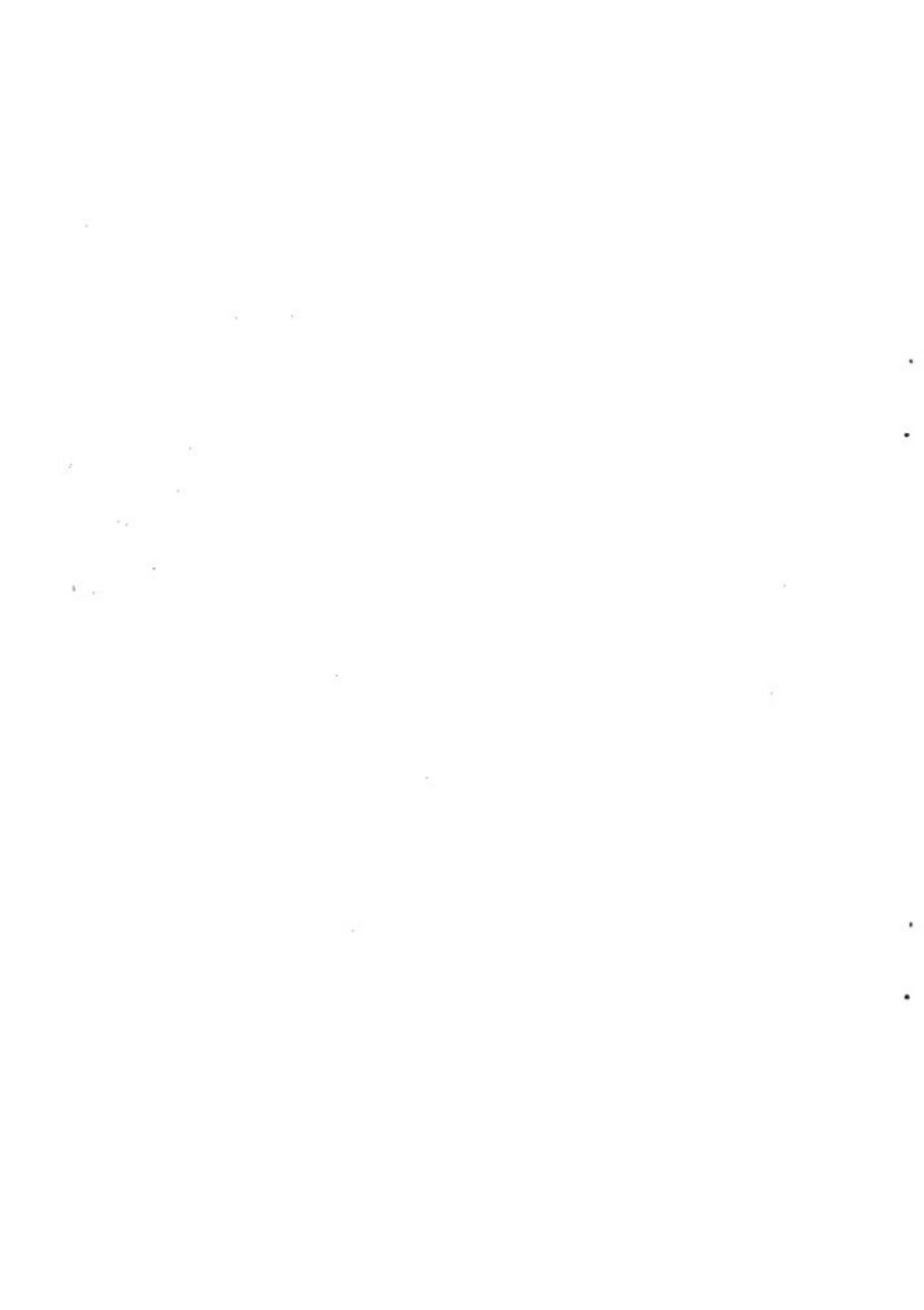




大谷遺跡遠景



(2) 大谷遺跡近景 (航空写真)



P-10



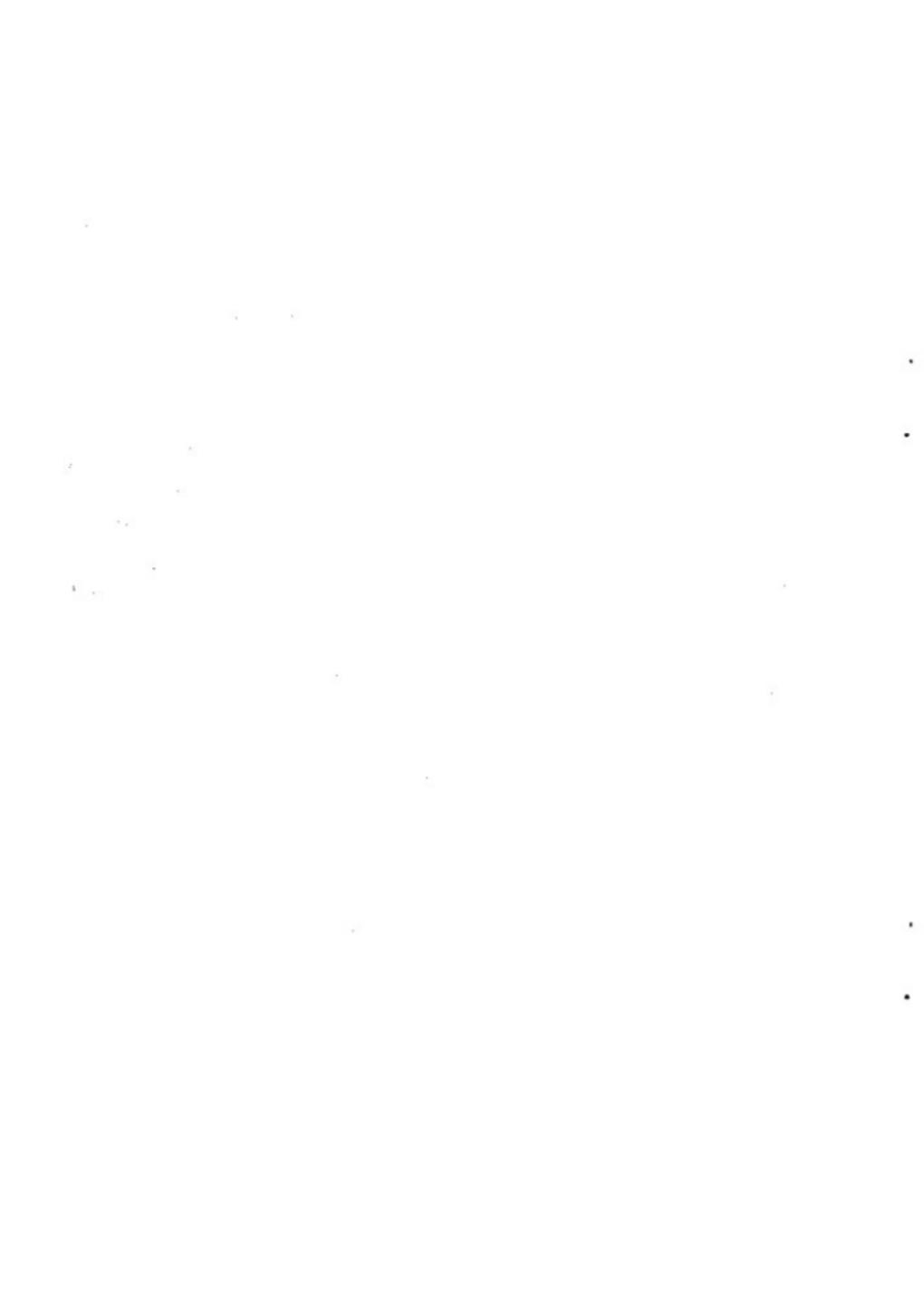
大谷瀧湖全貌
(航空写真)



P-15



大谷鹽礦調查地區全貌
(航空寫真)

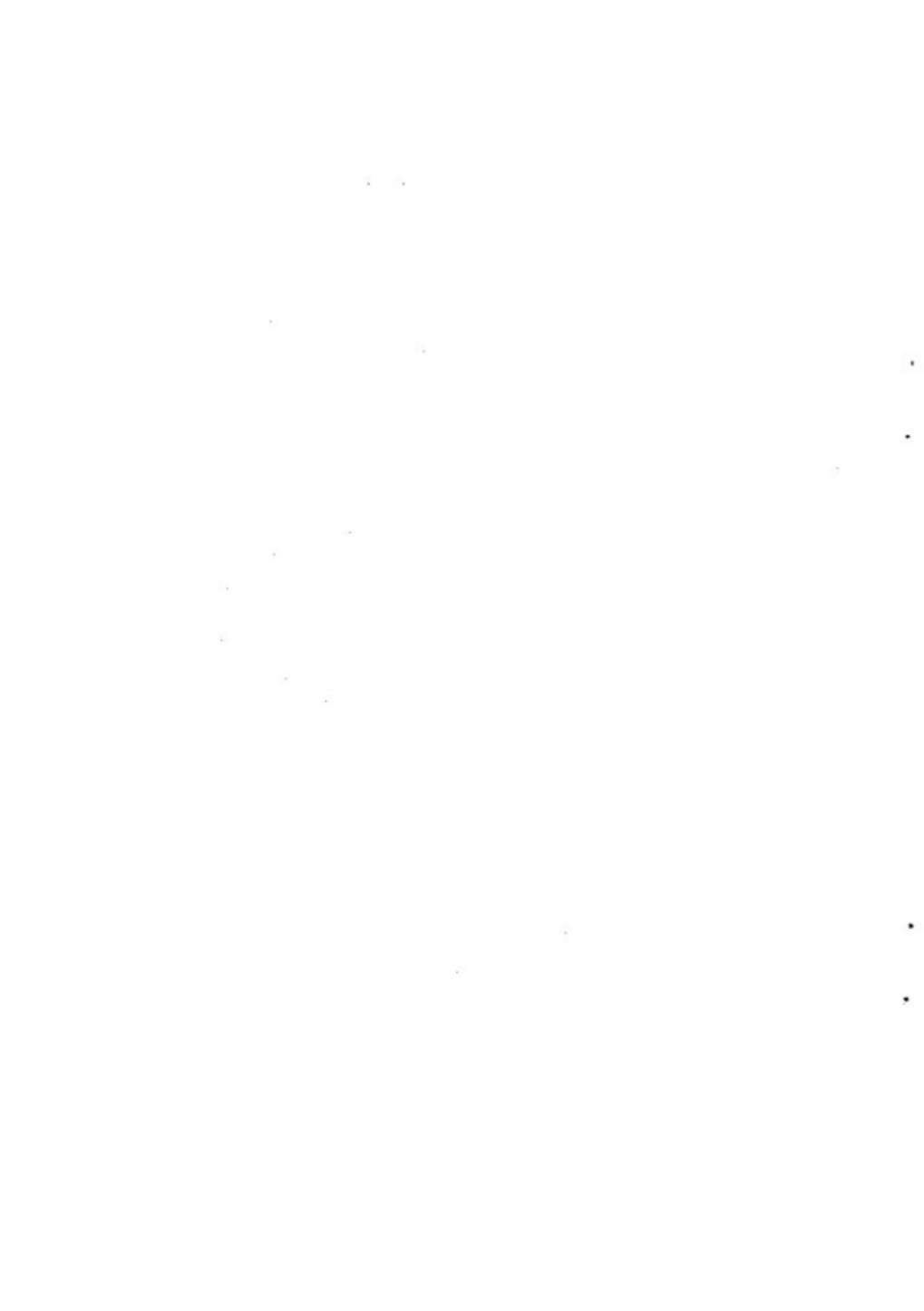




(1) 大谷遺跡 東から



(2) 大谷遺跡 西から





(1) 2, 3号住居址 西から



(2) 2号住居址内青銅製鋤先出土状況

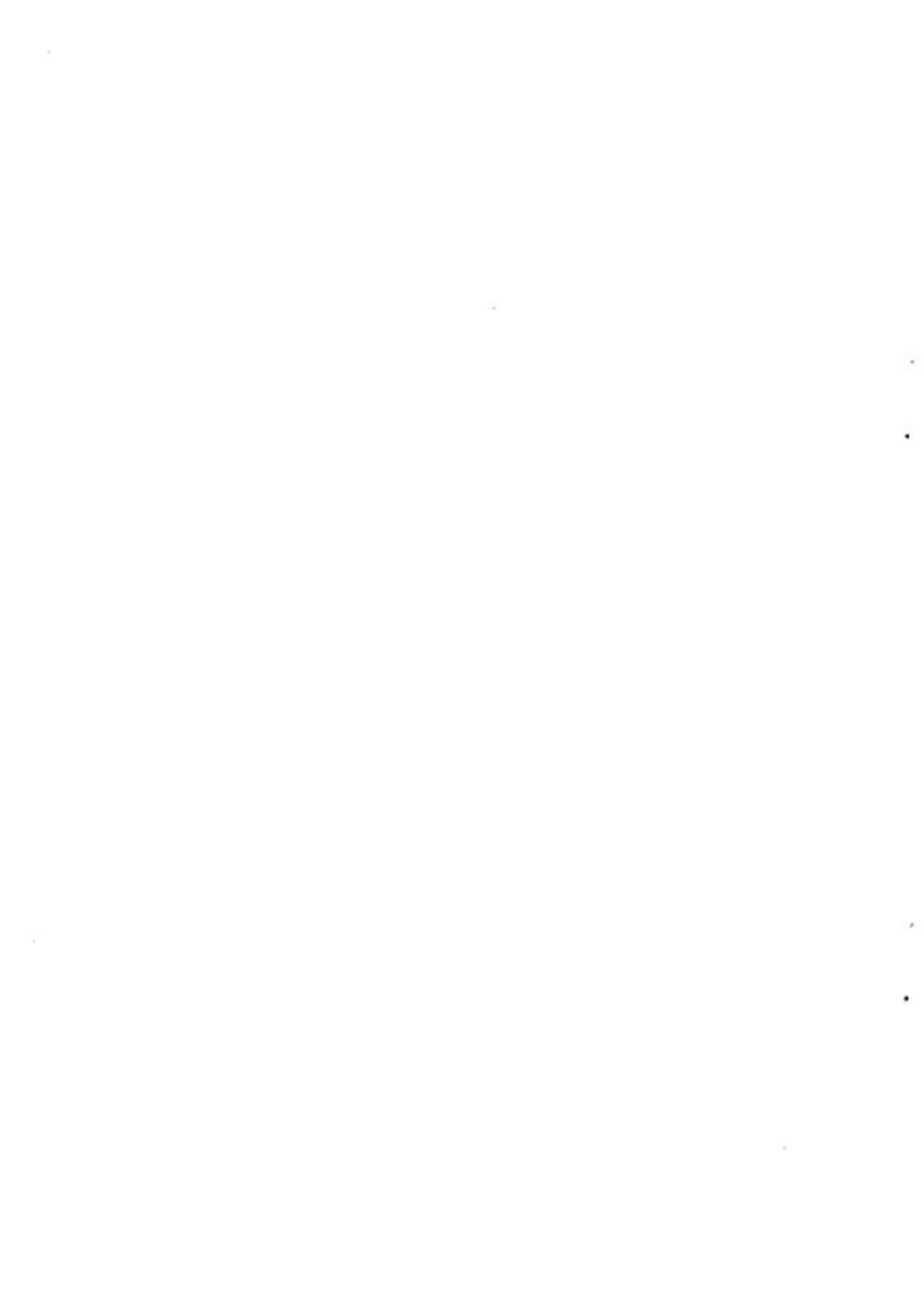




(1) 2号住居址内遺物出土状況



(2) 4・9号住居址、溝状遺構 西から





(1) 6, 7号住居址 西から



(2) 8号住居址 北から





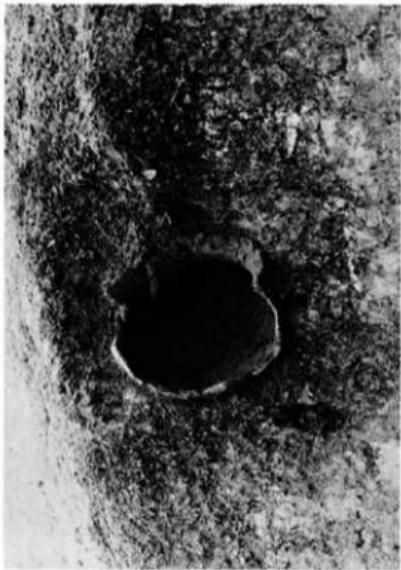
(1) 2号住居址内铁矛出土状况



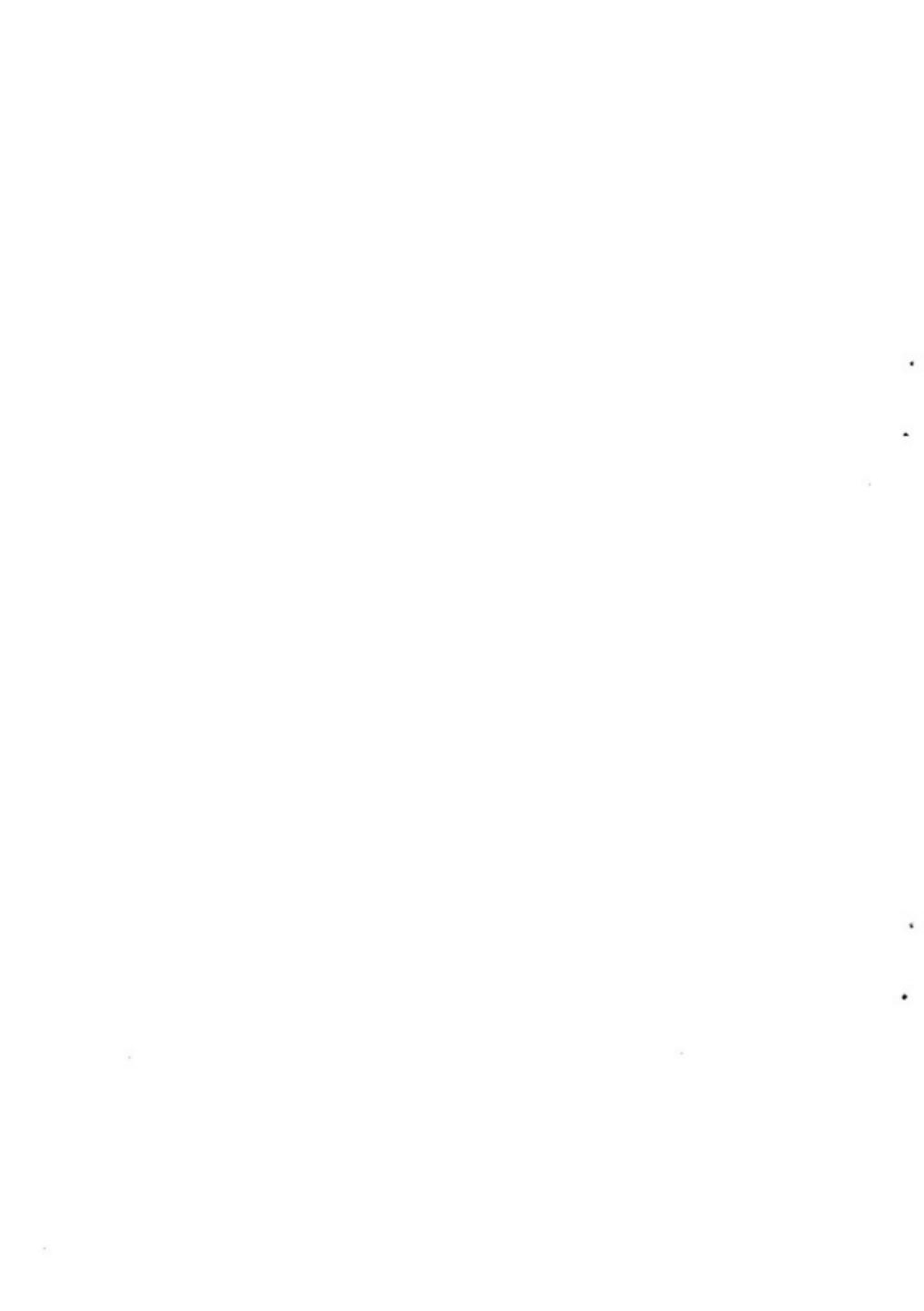
(3) 6·7号住居址出土物出土状况

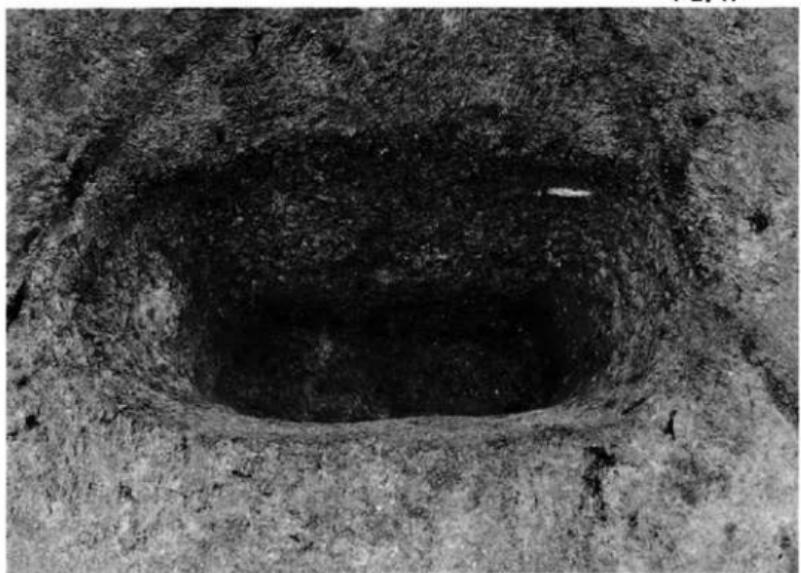


(4) 7号住居址内集石



(2) Pit 内土器出土状况





(1) 1号土塁



(2) 久保園遺跡全景（航空写真）

1

1

1

席田遺跡群調査概報Ⅱ

昭和58年8月8日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

